

全国 OB・OG 巡り第 14 弾！ 菊地原さんインタビュー！！

Interview with Mr. Kikuchibara, Urban Design Lab's Ex-member

text_NAKAMURA/MI

今月 17 日、全国 OB・OG 巡り第 14 弾として甲府に出向きました！

現地では、研究室 OB で現在甲府市にお勤めの菊地原徹郎さんにインタビューを実施し、生まれ育った甲府で働くことの魅力や苦労などを語っていただきました。インタビューの後は、菊地原さんが行きつけの飲食店をはしごして、美味しいワインと地方都市での夜を堪能しました。



◀ 都市計画図を使って甲府の都市計画について議論。
◀ 飲食店を 2 軒はしごした後、宿泊先のゲストハウスで記念撮影。飲食店のオーナーも、ゲストハウスのオーナーも菊地原さんの知り合いだそう。(中央が菊地原さん)



菊地原 徹郎 氏

2004 ~ 2008 年
慶應義塾大学 S F C
2008 ~ 2010 年
東京大学大学院
(都市デザイン研)
2010 ~ 2015 年
㈱日本設計
2015 年～
甲府市役所

> 在学中はどのような研究をしていましたか？

関わっていた研究プロジェクトは足助と北沢研の田村。研究テーマは端的に言えば「地方都市の再生」。歴史的街並み等の分かりやすい地域資源を持たない甲府のような地方中小都市が常に頭の中にあり、その再生手法を模索している中で、社会システム根本から見直す必要があると考えた。結果、修士論文では地域経済や地域産業のことに目が行き過ぎて「空間」になかなか帰着できず、まとまりきらなかった苦い思い出がある。

> 甲府のまちに興味を持ったきっかけは何ですか？

甲府の「まちなか」で生まれ育ったことが全ての原点。遊び場でもあった中心市街地の衰退を目の当たりにする中で「甲府のまちを何とかしたい」という思いが次第に強くなっていた。まちづくりを勉強したいと思い、そこで都市計画という学問を見つけ、大学・大学院に進学し、そして今、甲府市役所で都市計画を実務にしている。自分でも甲府のまちに対して「よく飽きないな」と思う(笑)

> 一度、設計会社に勤めた理由は何ですか？

大学院の知識だけでなく、実務としての都市計画や都市デザインの技術を身に付けたかったから。都市とどのような立場で向き合うか考えたときに、自分は都市計画等の専門技術により都市課題を解決しようと考え、縁あって日本設計に入社させていただいた。キャリアプランを考えたときに、「自分の専門は都市計画です」と胸を張って言えるようになった。

> 設計会社ではどんな仕事をしていましたか？

主に担当したのは東京駅前の八重洲地区の再開発事業。コンサルタントとして都市計画決定に向けた行政協議や事業計画の検討、権利者対応等を担当していた。非常にハードな 5 年間であった。新人の自分に出来ることは限られていたが、プロジェクトの当面の目標であった都市計画決定に微力ながら関わることができ、濃密で充実した時間を過ごせたことに感謝している。

> 甲府に戻ることに決めたのはなぜですか？

30 歳、社会人 5 年目というタイミングを迎えたこと。今一度自分が人生をかけて取り組みたいことを考え、やはり甲府のまちと正面から向き合いたいと強く思った。甲府で都市計画をやりたいのであれば、基本は行政。市の公務員試験の年齢制限が 30 歳。仕事のタイミングや家庭事情等も総合的に勘案して、今しかないと思った。

> 東京を離れることに抵抗はなかったのですか？

甲府でしか出来ない仕事をするためには必然だったし、東京での生活を続けることに強いメリットを感じられず自分が東京で将来的に生活する将来像が全くイメージできなかった。いざとなれば新宿まで 90 分、という心理的な近さもあり、東京を離れることに抵抗はなかった。

> 東京での生活で得られたものはありますか？

都市計画の技術力の取得はもちろんのこと、民間企業の

仕事の進め方を学べたことは大きかった。実務の都市計画の動きや仕組みに触れたことも良い経験となった。しかし、一番の収穫は「人との繋がり」。学部時代から通じて、真剣に都市計画・都市デザインに向き合う人たちが出会えたのは大いに刺激になった。

> 甲府市役所に入ってからは何をしてきましたか？

市役所には土木職として 2 年前に入社し、昨年度は道路・河川の維持管理の仕事に従事していたが、今年度、都市計画課に異動になった。本課では、都市計画マスタープランの改訂を主に担当している。10 年に一度の改訂のタイミングに関われ、光栄であると同時に非常にプレッシャーも感じている。「甲府の都市計画に関わりたい」と思ってきた中で、想像よりずっと早くその立場に立つことになったのだが、このような重要なタイミングは自分にとっても甲府市にとっても二度とないかもしれない。だからこそ、今出せる最高の力を出したい。

> 地元に戻って苦労したことはありますか？

地方都市に共通する、行政・民間ともに「まちづくりのプレイヤー」が不足しがちなこと。例えば行政で言えば、20 万人弱の自治体組織なので、まちづくりに従事できる職員が不足することにも、定期的な異動によって特に都市計画分野の人材育成が難しい。甲府市は「地方都市の課題最先端都市」である。この状況を脱却するためには、官民が連携し、同じ方向を向いて多発的にまちづくりを進めなければならないと考えている。今、甲府は、まちづくりを動かすタイミングだと思う。単位は小さくても多様なプロジェクトが起こるような仕組みづくりを行いたい。そのためにどのように「まちづくへの共感者」を増やせるか。公務員であり民間のプレイヤーにはなれないからこそ、その課題の難しさを強く感じている。

> 甲府で都市計画を行うにあたって難しいところは？

甲府にも地方都市共通の都市計画上の課題があるが、特有の課題としては市域の形状に起因した都市計画コントロールの難しさがある。甲府盆地はコンパクトで一体の経済・文化圏域を形成しているが、複数の市町村に分かれており、その中で甲府市は南北に長く東西に狭い面積をしている。さらに、複数の都市計画区域が存在し、それぞれ都市計画の考え方が異なるため、例えば甲府市が開発の規制を過度に強めれば、人口や産業が容易に市外に流出してしまう可能性がある。人口減少社会においてコンパクトシティを目指すなくてはならないが、その実現方法について甲府は特に悩ましい課題を抱えている。

> 甲府で働くことの魅力は何ですか？

ワークライフバランスが実現できる都市であること。県の地勢的な中心でもあるため、平日は都市的な生活を送りつつも、休日は車で富士山や八ヶ岳方面に気軽に抜けられる。東京にも気軽に遊びに行ける。さらに職住近接の生活もできる。仕事さえあれば、選択肢に富んだ豊

かな生活を送れる場所だと思う。

> 描いている甲府のビジョンやまちづくりの目標は？

良い意味で「田舎」な山梨県の中で、甲府は数少ない「都市」であり、県全域から多様な人が集まる交流の場である。県内最大の都市である強みを活かしたまちづくりを進めたい。そのために、まずはまちなかの居住者数を増やしたい。まちなかに住んでいると通勤も楽し、運転を気にせず飲みにいける。面白い人と出会える機会も増える。そのような環境づくりに向けて、特にまちなかの空き家をどのように住み替えさせるかにチャレンジしたい。また、公共空間を中心とした魅力的なエリアづくりを行い、都市としての価値を高めた。現在は都市計画マスター「プラン」という広域スケールを扱っているが、やはり慣れ親しんだスケールの「プロジェクト」を動かしたい。特に道路空間のデザインや沿道のエリアマネジメント等により、ここで「営み、生活したい」と思われるようエリアの一つでも多く創造したい。

> 大学時代にやっておくべきことはありますか？

都市計画系の学科だからこそ、他流試合に慣れることが大切だと思う。社会では、都市計画は建築か土木の領域と考えられている。大学時代にこれらの学部の人たちとも交流を密にして、相撲で言う「出稽古」を頻繁に行い、その技術や考え方に触れて、自分の領域の裾野を広げる取り組みを行うと良いのではないかと。また、都市と正面から向き合う姿勢を身に付けておくことも大切だと思う。最悪、技術力は社会で身に付けられる。自分が本気で関わりたいと思えるまちに出会い、数多くの「ぶつかり稽古」をこなしてほしい。時間に比較余裕がある学生のうちに、まさに「のめり込む」体験をしてほしい。

> 都市工出身や都市デザイン研の強みとは何ですか？

分野やスケールを横断できる力ではないか。都市政策や多様な意見を統合し、実際の都市空間における施策やプロジェクトに具現化し、さらに人間的で心地よい空間を想像・創造し「絵」で表現できる力。振り返ると研究室プロジェクトはそのプロセスを鍛える良い機会だった。

> 最後に

「地方都市で都市計画をやる」ことは、「都市計画という枠を飛び越えていくこと」だと思う。地方都市では今、都市の「生き残り」計画が求められている。都市計画の本流である土地利用から、これまであまり扱ってこなかった空き家等の建物単体のレベルまで、あらゆる手を使って戦略を考え、実行に移さなければならぬ。人材も財源も不足している中で、創意工夫によりプロジェクトが連鎖的に動けば、ドラスティックに変わる可能性を秘めているのが地方都市の醍醐味。一人でも多くの都市工や都市デザイン研という有益な場で経験を積んだ人々が、このチャレンジングなフィールドで戦ってくれることを期待しています！！

あの頃の研究室



◆取材を終えて◆ 菊地原さんとお話するなかで、『自分のまち』を持つということはこういことか、と感じさせられました。仕事においてもプライベートでも都市を愛し、都市とともに生きるという、都市計画に携わる人間としてあるべき姿勢を教えていただいたような気がします。お仕事が特に忙しい時期であるにもかかわらず、親切に対応くださり、ありがとうございました！

コラム 私の歩いた甲府



甲府城跡から見るまちの景色。盆地にまちは広がり、まちの背景には山が見える盆地特有の景観

東京の朝を象徴する満員電車、中央線。不思議なことに、そんな中央線に揺られて約2時間半もすれば、甲府に着く。近いようで、降り立つ機会はなかなかない。身近なようで、多くを知らない。小学校から高校まで一緒だったけど、大学生になって初めてしゃべる友人のような、新鮮な体験だった。

城下町としての二度の町割り、戦災復興の区画整理は、力強く、明瞭な骨格をまちに与える。まちを見渡せば、常に背景に大らかな山容が目に入り、盆地の地形を意識する。まちはその限られた平地を埋め尽くさんとはかりに、いばいに広がる。平地の北端まで歩けば、南斜面の好立地に、かつては戦国時代の甲斐守護武田氏の居館、武田信玄を祀る武田神社がまちを見守っていた。甲府の骨格は、武田神社の参道だったと気付くのである。

甲府のまちには、様々な時代がぎっしりと共存している。城郭跡には、大正時代に伊東忠太によって設計された謝恩碑が空にまっすぐ伸びる。石垣の上に粗暴に設置されているその様は、当時の帝国陸軍の姿を想像させる。北口の線路際には、甲州夢小路と呼ばれる、江戸時代の鐘楼や、古民家・蔵のリノベーション建築により明治・大正・昭和のレトロなまちなみが造られている。そして、最も印象的な景色は、駅北口の景色である。そこには、明治時代の木造の擬洋風建築と、おどろおどろしい鉄筋コンクリート造のモダニズム建築と、鉄とガラスでできた現代建築が、何食わぬ顔で並んでいる。

今度の来甲では、周囲の山々に抱かれ、四百年以上の歴史を持ち、あらゆるものを許容するとしりと構えた甲府の姿が浮かび上がった。最少人口の県庁所在地ならではの生活のあり方も目の当たりにした。



平地の際に建てられた武田神社から南にまっすぐ伸びる参道



南部の繁華街では、ビルの一階部分が道と垂直な方向に通路として解放されていて、そこに面して飲み屋が玄関を設ける特異な空間がありました。



左から、山梨県立図書館、甲府市藤村記念館、山梨文化会館

高校生が都市デザイン研究室に来たる！？

Showing High School Students over Urban Design Lab text_TANAKA/M1

10月21日、長野県立飯山高校の生徒が同校の行事「サイエンスツアー」の一環で、東京大学を訪れました。都市デザイン研究室を見学する生徒に対しては、中島伸助教、永野助教と修士課程の学生2名がキャンパスを案内した後、都市デザイン研究室にて、研究室が行っているプロジェクトや研究についての説明を行いました。



▲赤門前で写真を取る一行

◀正門前での集合写真
右から、中島伸助教、永野助教、飯山高校の生徒のみなさん

Information

10月のウェブ記事

- その他 秋卒業生追いコン開催！！
- カトマンズPJ シカリフェスティバル in コカナ・ネパール
- 三国PJ 「三国まちなか空き家巡り みにくくみく」開催しました
- 三国PJ UDCK・UDC2勉強会を実施しました。
- 神田PJ 講演会「学生の目から見た神田」に登壇！
- ぜひご覧ください！ <http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

11月の予定

- 11/5 神田PJ「こども神田まち探検」
- 11/14-17 研究室旅行@バンコク

編集後記

中村 慎吾

久々のOB・OG巡り企画として実現した菊地原さんへのインタビュー。訪れた甲府のまちにはすっかり秋空が広がり、南アルプスがきれいに見渡せました。時の流れの速さに一抹の焦りを感じずにはられない今日この頃。しっかりと地に足をつけて残りの院生生活を送りたいものです。私にとってOB・OG巡り企画は初めてでしたが、たいへん良い刺激になりました。ラブコールをお寄せいただければぜひとも東京から駆けつけたいと思います。